理不尽過ぎる法律

～愛する娘幸姫（ゆきひ）と孫愛鈴（ありん）の二人のために～

Ｙ・Ｎ

２０１２年４月２３日の午前７時５８分頃、日本中を震撼する史上稀に見る交通事故、いや交通犯罪が京都の小さな田舎町で起きました。それは、ルールを守って小学校に通う幼い子供たちと付き添いの母親（愛する我が娘の幸姫）、それも妊娠７ヶ月の妊婦を背後から無謀極まりのない無免許の卑怯者が、ハンドルを握り襲いかかり、お腹の中の赤ちゃん（愛する我が孫の愛鈴）を含め、４人を踏み潰し死亡させ、７人の重軽傷者を出したのです。

幸せな日常風景が、一瞬で残酷な修羅場と化しました。卑怯な加害少年は、一晩中無免許を繰り返し、ある時は一台の軽四乗用車に８人が同乗していた時もあったそうです。そして、無免許であったとしても繰り返し運転して慣れていれば「技能あり」と認められる法の壁が、私たち遺族に立ちふさがったのです。

現在、民事訴訟が始まったばかりですが、愛する亡き娘と孫の無念を代弁する遺族も犠牲者で、その哀しみの連鎖が多くの人を不幸にしているのです。ルールを守っていたにも関わらず生命を奪われた者たちは、加害者がルールを無視していた状況を証明することなどできないのです。残るのは理不尽な事だけ！

お腹の中の孫の愛鈴は、もうすぐ８ヶ月でしたので、光を浴びて幸せになれる権利を持つことができていたはずです。もう直ぐ８ヶ月、早産で産

まれたとしても１５００グラムはあったはずです。

２９年前に幸姫の兄である息子の龍生は、初めての我が子でしたが、８ヶ月の早産で産まれました。そのまま２ヶ月間保育器で護っていただき、私は２日に一度、母乳を冷凍にして病院に運んでいました。今では最愛の妹である幸姫の名誉を守れる「たくましい男」へと兄は成長しています。

だからこそ、母親幸姫の母胎から愛鈴が出生してさえいれば、今の医療科学なら間違いなく「愛鈴」は「孫」として生きていました。

火葬場では、愛鈴のお骨である手も足も喉仏までも拾うことが出来ました。それなのに、他人の身勝手な犯罪で光を浴びることはなく、４人の卑劣な加害少年らに踏み潰され殺されてしまった事実があるのに、この日本は、愛鈴を一人の人間として、生命として認めてはくれません。そのことには、知らないことのように触れようともしません。次々に襲いかかる理不尽が、これ以上立てない傷だらけの自分の胸を突き刺そうとしています。

事件から３年以上が経ち、もう世間の記憶から薄らいでいく中、遺された遺族の傷は癒されることのないまま今を迎えようとしています。

当初、検察庁は、少年の供述の居眠りを証拠として、居眠り運転をしていたことによる過失としていますが、居眠り運転は危険なことではないのでしょうか。長時間運転出来たことが技能を有するとしていますが、危険運転にならないのでしょうか。何より免許を取得したことのない者が無免許運転したこと自体が危険運転なのではないのでしょうか。

月日が経とうとも納得出来ない事だらけです。私たちは、事故後に家族の死に耐えながらも自らの力で署名活動を行い、一般市民一人一人の賛同

を数多くいただきました。

愛する幸姫と孫の愛鈴の無念を晴らすことは、この不条理を世間に知らせ、これからの未来の弱い者たちの涙を苦しみを防ぐ為に、正しい判断を示すこと。だからこそ、自分には闘う力が必要なのです。強くならないと挑んで行けません。並みの執念だけでは、直ぐに尽きてしまいます。

娘を殺されて月日がどんどん経って行くということが、どんなに酷く苦しいことか。あの子だけを置き去りにして終わらせているのではないかと罪の意識が生まれてしまいます。構成要件に該当しない、充たしていないとならない理不尽な法律、交通殺人を自然化してほしくありません！理不尽なら、皆さんに聞いてもらい確認し、正しく改正するべきでしょう。

不治の病で死んでいった者は見送られる覚悟と遺す言葉、遺族は見送る覚悟を、できるかもしれないけど、それでもそれでも気が狂うほど諦められない生命なのです。交通殺人は予告もなく、永く確かに続く生命が突然消えて失くなります。覚悟の約束も交わせなかった亡き者も家族も犠牲者です。

自分は過激で学もない。そんな自分でも、どんなに大きな者たちを敵に回しても屈しないと、闘いの誓いを幸姫にしたんや！俺は、幸姫のお父さん！負けへん父親の想いを伝えてるんや！幸姫と愛鈴に線香を立て、好きな食べ物供えてやる自分？そんな姿解らん！何もかも幸姫の影だけが見えて来ない、俺は生きる犠牲者、悲しみの表現者や！幸姫は笑いながら泣いてるんや！

この生命を無理矢理奪ったのに、更正するために生きる権利を主張する

者たちを許さない、私は、正義の法の番人になってやります。